

# 破片、雄弁な語り部に

## 斬新手法広がる可能性

### 土器に眠る

#### 記憶

— 下 —

火山ガラスを用いた土器研究の手法は、2017年度の科学研究費助成事業(科研費)の「挑戦的研究(萌芽)」という分野に、39年の助成期間で採択されている。

しかし、本番は研究がまだスタートする前の昨年まで進められたのか。謎

に包まれたこの土器片が弘前大学人文社会科学部の前根達人教授たちの元に取り込まれたのは同3月、すくさま火山ガラスを用いる手法を応用し、5月までに土器片は西日本一円に存在する火山灰で製作された精巧な模倣品であることを解き明かし、再び人々を驚かせた。まさに「挑戦的研究」の「萌芽」ならぬ、早咲きの「開花」だった。

それから1年、27日に明治大学で開かれた日本考古学協会総会で発表された。北海道の土器に関する成果は、研究手法確立への手応えを、今後の可能性の広がりを感じさせるものとなった。

発表会では、弘前大学理工学研究科の柴正敏・元教授と、同大学院1年の近藤美左紀さんが研究内容を説明。斬新な手法が、特に

若手の研究者たちを強く引きつけていた。従来の土器の胎土分析は、土器の表面にX線を当てて土の成分を調査、分類していく非破壊分析が中心だった。一方、火山ガラスを使った手法は、土器の断面を薄く研磨した切片にする必要があるが、「火山」という動かぬ比較対照があるのが優位な点だ。

会場で近藤さんから説明を受けていた、北海道埋蔵文化財センター調査部の佐藤剛志査は「破壊分析ではあるが、結論と、その原因との因果関係が、より明快に証明できる。これまでの可否が明らかにされると思うし、他の時代の遺物にも応用できるはず」と納得の表情を直せた。

研究チームが対象としているフィールドは、東北と北海道、九州と南西諸島の両地域。土器の移動や模倣をより鮮明に浮き上がらせるため、海峡を挟んだ地域

弘前大学最前線  
一年、突如やってきた。17年前、本県からはるか2千  
離れた沖縄県北谷町の  
平山原B遺跡で、亀ヶ岡  
式土器の破片が発見された  
ことが明らかにされ、大き  
なニュースとなる。  
「まさか、青森から沖縄  
まで運ばれたのか」。謎



日本考古学協会総会で火山ガラスによる分析方法について説明する近藤さん(左)＝27日、明治大学

を運んでおり、両地域とも火山活動が活発なことも有利な条件となっていた。南側を担当する石田准教授は「火山灰は広域に存在するが、土器本体を形づくる粘土や、混和材として入れられた砂粒などは、地質環境に応じた個性を持つ。この点に着目して、沖縄の亀ヶ岡式土器片の製作地をさらに絞り込みたい」と意欲を見せる。

関係教授は発表を終え「縄文と火山との関係は、重要なテーマの一つ。これからも地の利を生かした研究を戦略的に進めたい」。縄文社会の全体像に光を当てると、研究チームの地道な調査はさらに続

く。

(外崎英明)

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。東奥日報社に無断で転載することを禁止します。  
[問合せ先]弘前大学理工学研究科 E-mail:r\_koho@hirosaki-u.ac.jp